

東北次世代がんプロ養成プラン セミナー実施報告書

(セミナー名称)	
東北大学大学院医学系研究科がん看護学分野主催 7月がん看護勉強会	
事例報告者：副看護師長 堀川 長子 看護師 塚田 成美	
所属：東北大学病院東8階病棟	
テーマ：膵癌治療の現状と臨床現場における課題・事例報告	
担当者氏名：佐藤 富美子 教授	所属：東北大学大学院がん看護学分野
内線：7926	Email: fsato@med.tohoku.ac.jp
1. 実施年月日：	
平成 30年 7月 9日	
2. 開催場所：	
東北大学医学部保健学科D棟 217号室 がん看護学分野カンファレンス室	
3. 関連分野：	
がん看護、消化器外科、緩和ケア、チーム医療、家族支援、Advanced Care Planning	
4. 対象者：	
がん看護に興味関心のある医療関係者・大学教員・東北大学大学院医学系研究科保健学専攻学生・東北大学医学部保健学科学生	
5. 参加人数：(お分かりの範囲で内訳をお知らせください。教員、学生など)	
大学教員 3名、学部学生 3名(看護 3名)、大学院生 2名(看護 2名)、医療関係者 5名 (医師 1名、消化器外科看護師 3名、小児科看護師 1名) 計 13名	
6. 成果：	
<p>報告内容は、膵癌患者の治療経過、課題、緩和医療への以降の難しさ、事例(50歳代で膵頭部癌を発症した患者と家族の事例)、事例の家族のブログから読み取る治療への思いの分析等であった。</p> <p>成果は4点である。1点目は、医療者は緩和医療へ移行することが最善であるという善行によって関わっていたが、夫が最後まで治療遂行を希望しており、緩和医療への移行が難しかった点に倫理的葛藤を生じていたことが明らかになった。2点目は、治療の選択に夫の希望が優先された事例であったが、患者本人が何を大事にした生活をしたのか、その意思を確認するACPのプロセスの必要性が明らかになった。3点目は、医師は緩和医療への移行を外来のギアチェンジの段階から患者や家族にICしているが、患者はこれまでの治療プロセスによって信頼関係の厚い診療科の医師や病棟を希望している現状が明らかになった。4点目は、現状をより改善するために看護師は、今後の治療に関する情報を得て患者家族の思いを話し、患者家族と医師の調整を行う役割が期待された。以上を参加者で共有した。</p>	

【当日の会場の様子などの写真がございましたら、添付ください】

